
大学における子育て支援のあり方についての一考察Ⅱ

齋藤 めぐみ・清水 一巳・酒井 基宏

Study of the Child Care Support in the Junior College II

Megumi SAITO / Kazumi SHIMIZU / Motohiro SAKAI

キーワード：保育、子育て支援

本研究は子育て支援従事者、参加者を対象とした調査、加えて外部団体の子育て支援イベントに学生のボランティア派遣を行い、大学における子育て支援のあり方について検討した。その結果、自由に親子が集まれる「ひろば型」に学生や教員が短い講座や体験活動を取り入れた活動が望まれ、父親と母親間では希望の講座内容に若干差異がみられることがわかった。学生の参加が好ましいが、ボランティアスタッフの募集には課題が残った。

はじめに

本学の総合子ども学研究所は、「子ども」を様々な視点から、学問的・実践的見地に基づいて研究し、本学の教育及び地域の幼児教育・保育の充実発展に寄与することを目的として2009年に設置された。これまでも、地域の絵本の読み聞かせボランティアへの参加、教員の子育て支援関連の出張講座などの活動は行ってきたが、本学を拠点とした「子育て支援」事業は行っていない。地域貢献と学生の学習の場となる「子育て支援」のあり方を検討し、実施することが望まれる。

わが国において、「子育て支援」は重大な取り組むべき課題である。「子育て支援」について木脇（2012）は、本当に必要であることは、少子化対策としての子育て支援ではなく、「子育ての社会化」対策をどうするかを考える視点であると述べている。つまり、子どもを増やすことが第一の目的ではなく、子育ての枠組みを「母のみ子育て」に偏った構造から“性別や身内のみにとられない構造へとパラダイム転換することが求められている”（木脇、2012）。

齋藤（2023）は、先行研究をもとにして、大学における「子育て支援」の現状や課題、子育て支援のニーズを調査し、大学による「子育て支援」は、利用者だけのものではなく学生の学習の場となるべきであるとまとめている。

学生の関わり方としては、ボランティアというだけではなく、授業の一環として子育て支援事業を利用するという方法も考えられる。また、久保田（2021）が示しているように、卒業研究会

や作品展と連携するなど、現在ある活動との連携により行くと負担感が少なく、実行可能性が高いと考えられる。設定場所も、体育館を開放する、空き教室を使用する、というような現在存在する資源の利用だけでも工夫次第で「子育て支援」は可能である。

活動内容としては、ひろば型に講座などを入れる方式に多くの参加者が集まるということがわかり、今後、具体的な講座の内容を検討する必要がある。

齋藤（2023）は、大学による子育て支援のあり方、問題点、利用者のニーズ等について研究の動向を調査し内容を検討したが、実際の子育て支援事業管理者や利用者からのニーズは未検討となっている。

以上より、本研究は、現状や課題、子育て支援のニーズを実際に子育て支援に関わっている事業者や参加者からの調査、外部団体の子育て支援への参加により、具体的内容を含めた大学における「子育て支援」のあり方を検討することを目的とする。

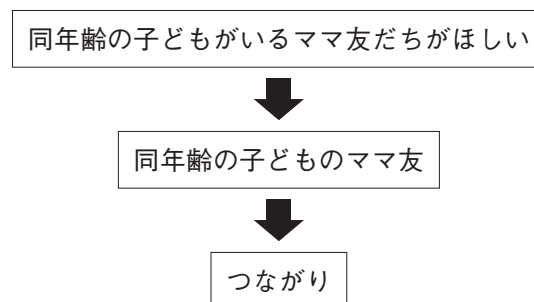
なお、本研究で検討する子育て支援は、前述した木脇（2012）の「子育ての社会化」対策をどうするかの視点をもった子育て支援という理解のもとにすすめる。

また、本研究は、千葉敬愛短期大学倫理委員会の承認のもと、調査対象者には予め書面と口頭による研究の趣旨説明を行い、同意を得られた上で実施された。

研究1：子育て支援事業の現況・参加者のニーズ

方法：自治体主催の子育て支援従事者を対象として、子育て支援事業の現況、従事者を通しての参加者のニーズを知ることを目的として、個別の聞き取りにより調査した。質問と記録は、研究者1名で行われた。聞き取り調査では、予め提示していた質問内容に基づき研究者が対象者に聞き取りを行い、話された内容を書き出した後、萱間（2007）を参考にしてデータをコード化して同類項をカテゴリーとしてまとめた。コード化の方法は図1に示す通りである。

図1 コード化



調査期間：2023年11月～12月

対象者：千葉県C市子育て支援事業従事者1名、千葉県N市元子育て支援事業従事者1名

倫理的配慮：調査実施にあたり、研究の目的と内容、個人情報の厳守について明記した文章を提示し、口頭でも説明をし、同意を得られた場合のみ研究対象とした。

結果と考察：子育て支援事業者による事業の現況と希望する事項、子育て支援事業従事者による参加者が支援に望むことについて回答を表1に示した。

問題としては人員不足、気になる親子の対応などがあげられた。希望として、学生のボランティアがあげられており、学生の学習の場として、自治体の行う子育て支援事業に関わること

表1 子育て支援事業の現況・参加者のニーズ

| 子育て支援事業の現況 | |
|----------------|--|
| 問題 | 人員の不足 小学生・市外者の利用 気になる親子のその後 家庭訪問の拒否 |
| 希望 | 学生のボランティア参加 母親の特技を生かしたイベント 子育ての母親が元気になること |
| 子育て支援活動の情報獲得方法 | |
| クチコミ | 習い事のママ友 |
| ネット | ネット検索 |
| 施設 | 有料施設 保育施設 |
| 自治体 | 検診 母親・父親学級 |
| 子育て支援活動に対する希望 | |
| つながり | 地域のつながりをもちたい 同年齢の親子が集まる場 同年齢の子どものママ友 |
| おしゃべり | 他愛のない話しができる場 大人同士のおしゃべりができる場 おしゃべりがしたい |
| 場 | ありのままの自分でいられる場所 |
| 設備 | 授乳、おしめ交換、ベビーカー置き場、駐車場 |
| 子育て支援の講座内容 | |
| 希望 | イライラする時の対処法 救急法 託児＋製作 子育てに関する全てのこと 一時預かり 子ども同士の関わりの経験 |
| 人気 | 15分位でできる活動 ベビーマッサージ フィンガーアート インスタ映え |

も今後考えられる。

子育て支援事業参加者の情報獲得方法としては、クチコミ、インターネット、施設、自治体のイベントで、ということであった。インターネットだけではなく、自治体による子育て関連イベント等で情報を得ていた。ただし、役所で渡される印刷物による情報は多すぎて、結局はそこから自分で興味のあることを選んで調べ直すということも聞き取り調査からわかった。印刷物については1種類で多くの情報を掲載するのではなく、ニーズ別に分けるなどの工夫があるとよいのではないかと考えられる。

子育て支援の場には、つながり、また、大人と話しをすることを求めていることがわかった。その中で単なる「ひろば型」で場の提供だけであると、なかなか保護者同士のつながりを持ちづらく、話しもしづらいため、短時間でも参加者が一つの何かを一緒に行うとよいとのことであった。千葉県N市の子育て支援事業では、広場として場を提供し、15分間程度の“にこにこタイム”と呼ばれるアクティビティの時間を設けており、保護者に人気ということであった。事業者は、母親が元気になると子どもも元気になることを実感しており、母親が元気になれる講座を母親と考えながら行うことが考えられる。

また、学生や教員が短時間でできる講座を提供すること、話しかける相手として学生が駐在することだけでも充分子育て支援を必要とする保護者のニーズに対応できるのではないかと考えられる。保護者が“インスタ映え”を望んでいることも本調査でわかった。

研究1において、単なる「ひろば」的遊び場の提供だけではなく、保護者同士がつながりをもてる短時間の講座を設けることが必要であると示唆された。そのため、研究2では具体的な講座の内容について量的に調査を行う。

研究2：子育て支援事業の講座内容に関するニーズ

方法：研究1の結果に基づき、子育て支援事業で行う講座の具体的内容の希望について知るべく、質問項目を精査し質問紙を用いて調査した。

調査期間：2023年12月

対象者：千葉県内の子育て支援事業施設主催のイベント参加保護者22名

調査項目：

- (1) 回答者のプロフィール：子どもの年齢（0歳～7歳以上から選択）、子どもとの関係性（父親・母親・きょうだい・祖父・祖母・その他から選択）、回答者の年代（10代～70代以上から選択）、回答者の性別（男・女から選択）、回答者の就業状況（フルタイム・パートタイム・アルバイト・なし・その他から選択）
- (2) 活動の感想（非常に楽しんでいた・楽しんでいた・まあまあ楽しんでいた・楽しんでいなかったから選択）
- (3) 興味のある講座（子どもの心理や発達に関する話・運動遊びの話と体験・絵本や紙芝居の話と体験・歌と楽しむ体験・絵や工作などの製作体験・その他から複数回答可で選択）、子育て支援関連の情報収集先（かかりつけ医や出産時の病院・保育園、幼稚園、こども園等の保育施設・子育て包括センターや役所・家族や身内からのクチコミ・友人、知人からのクチコミ・SNSやインターネット・その他から複数回答可で選択）

分析方法：サンプル数が少ないため、統計処理は行わず、単純集計とした。その後、回答者の子どもとの関係性の違い（父親・母親）による差異を比較した。

倫理的配慮：調査実施にあたり、研究の目的と内容、個人情報の厳守について明記した文章を提示し、口頭でも説明をし、同意を得られた場合のみ研究対象とした。

結果と考察：

(1) 回答者のプロフィールを表2-1、表2-2に示した。2歳児、4歳児、6歳以上の子どもの保護者が多かったが、子どもの年齢は分散していた。回答者には母親が多く（72.7%）、30代が半数以上（59.1%）を占めていた。

表2-1 回答者のプロフィール(1)

| 子どもの年齢 | | |
|---------|-----|------|
| 年齢 | (名) | (%) |
| 0歳 | 3 | 13.6 |
| 1歳 | 3 | 13.6 |
| 2歳 | 6 | 27.3 |
| 3歳 | 4 | 18.2 |
| 4歳 | 6 | 27.3 |
| 5歳 | 2 | 9.1 |
| 6歳 | 5 | 22.7 |
| 7歳～ | 6 | 27.3 |
| 子どもの数 | | |
| 人数 | (名) | (%) |
| 1人 | 11 | 50.0 |
| 2人 | 9 | 40.9 |
| 3人 | 2 | 9.1 |
| 子どもとの関係 | | |
| 父/母 | (名) | (%) |
| 父親 | 6 | 27.3 |
| 母親 | 16 | 72.7 |

表2-2 回答者のプロフィール(2)

| 保護者の年代 | | |
|----------|-----|------|
| 年代 | (名) | (%) |
| 20代 | 2 | 9.1 |
| 30代 | 13 | 59.1 |
| 40代 | 5 | 22.7 |
| 50代 | 1 | 4.5 |
| 保護者の就業状況 | | |
| 年齢 | (名) | (%) |
| フル | 9 | 40.9 |
| パート | 1 | 4.5 |
| アルバイト | 4 | 18.2 |
| なし | 7 | 31.8 |
| その他 | 1 | 4.5 |

(2) 活動の感想について、表3に示した。参加者は、子育てイベントで実施した製作活動と絵本の読み聞かせを概ね楽しんでいたことがわかった。同イベントには本学も学生と参加し、参加した親子に製作体験や絵本の読み聞かせなどを提供して、製作活動では、学生が用意した用紙に色を塗ったり絵を描いたりしてクリスマスの飾りを作るものであり、活動としては単純なものであった。短時間でできること、色や絵を自由に自分の工夫次第でどのようにも描けることがよかったのではないかと考えられる。行う内容について、実習では、もう少し複雑な物を作成したりするが、このようなイベントにおける製作は、簡単にできるものが好まれることがわかった。また、絵本の読み聞かせは、どのような場所においても子どもの好きな活動であると考えられる。

表3 学生主体の活動に対する参加者の感想

| | 活動に対する感想 | | | | | |
|------------------------|------------|---------------------|----|------------------|----|--|
| | 参加者 (名) | 非常に楽しかった (名) (%) | | 楽しかった (名) (%) | | |
| サインペンを使ったクリスマスの飾りの模様作成 | 20 | 12 | 60 | 8 | 40 | |
| 絵本の読み聞かせ | 12 | 6 | 50 | 6 | 50 | |

(3) 興味のある講座、子育て支援関連の情報収集先についての結果を表4に示した。どの講座内容にも興味はあったことがわかったが、話を聞くだけでなく、体験がある方がよいことが示唆された。父親は運動遊びについて興味が高く、絵や工作、歌については母親の興味が高かった。興味について、性差がある可能性が示唆された。

表4 興味ある活動と情報収集先

| 講座内容 | 興味のある講座 | | | | | |
|----------------|---------|------|-----|-------|-----|-------|
| | 全体 | | 父親 | | 母親 | |
| | (名) | (%) | (名) | (%) | (名) | (%) |
| 子どもの心理や発達に関する話 | 9 | 40.9 | 3 | 50.0 | 6 | 37.5 |
| 運動遊びの話と体験 | 14 | 63.6 | 6 | 100.0 | 8 | 50 |
| 絵本や紙芝居の話と体験 | 12 | 54.5 | 3 | 50.0 | 9 | 56.25 |
| 歌を楽しむ体験 | 10 | 45.5 | 1 | 16.7 | 9 | 56.25 |
| 絵や工作などの製作体験 | 14 | 63.6 | 2 | 33.3 | 12 | 75 |
| その他 | 0 | 0.0 | | | | |

| 収集先 | 子育て支援関連の情報収集先 | | | | | |
|--------------------|---------------|------|-----|------|-----|-------|
| | 全体 | | 父親 | | 母親 | |
| | (名) | (%) | (名) | (%) | (名) | (%) |
| かかりつけ医や出産時の病院 | 2 | 9.1 | 1 | 16.7 | 1 | 6.25 |
| 保育園、幼稚園、こども園等の保育施設 | 15 | 68.2 | 5 | 83.3 | 10 | 62.5 |
| 子育て包括センターや役所 | 8 | 36.4 | 2 | 33.3 | 6 | 37.5 |
| 家族や身内からのクチコミ | 10 | 45.5 | 4 | 66.7 | 6 | 37.5 |
| 友人、知人からのクチコミ | 8 | 36.4 | 0 | 0.0 | 8 | 50 |
| SNSやネット | 14 | 63.6 | 3 | 50.0 | 11 | 68.75 |
| その他 | 0 | 0.0 | | | | |

研究3：子育て支援イベントにおける学生の関与

イベント1

方法：自治体主催の子育て支援イベントのボランティアとして関わった参加者を対象として、イベントのあり方を検討することを目的として、自由記述式の質問紙を用いて調査した。

調査期間：2023年10月

対象者：千葉県栄町の子育て包括支援センター主催のイベントに講師として参加した

調査方法：改善すべき点、今後の方向性等の自由記述

倫理的配慮：書面と口頭で研究の主旨を説明し、同意の得られた人物に調査を行った。

イベント概要：「栄町パパの子育て磨き塾」

- ・開催日：2023年10月21日（土）
- ・主催団体：栄町子育て包括支援センター
- ・ボランティア実施にいたる経緯：栄町から本学教員に講師依頼を受ける。
- ・詳細：千葉県印旛郡栄町に居住の3歳未満の子どもとその父親を対象にした3回の連続講座として実施された。第1回が本報告の活動の「楽しく親子遊び」である。（第2回は「チャレンジ楽しくパン作り」、第3回は「クリスマスグッズを作ろう」といった様々な形で、子どもと関わりながら、子育てを行っている父親同士のコミュニケーションの場として設定されている。）
- ・参加学生：2年生1名
- ・学生ボランティアの募集方法：本学のボランティアサークルを通して、栄町居住の学生に依頼した
- ・準備期間、内容、準備の様子等：事前に活動内容の打合せをし、準備として活動備品の製作を行った。学生は、ビニール袋パラシュートの材料を当日の製作手順に沿って試作し、ビニール袋の形状を整える等の準備を行った。

結果と考察：

(1) 当日の様子

ふれあいプラザさかえを会場として、5組の親子（父親5名、子ども8名）が参加し、10時から12時の2時間の講座が実施された。子どもは、生後5か月から5歳の兄弟姉妹も含めた8名が、父親と一緒に参加した。

身近にある素材（新聞紙、ビニール袋等）を通して、子どもの感覚を刺激する遊びから始まり、親子で協力しながら挑戦するビニール袋風船運びやビニール袋マントづくりを通して、子どもの興味がどのようなことにあるのか父親に考えてもらった。生後数か月の子どもから活動的な5歳の子どもまで、一緒に活動したため父親は年齢の低い子どもに対応し、学生ボランティアとスタッフが、3歳以上の子どもに対応しながら、個々の興味に合わせて風船やマントの形状などを変えて製作していった。

後半では、新聞紙とビニール袋をつなぎ合わせた新聞紙バルーンハウスの作成を行った。その際、初対面ではあったが父親同士の協力が出てきており、それを見た子どもにも一緒にテープを貼るなどの行動が見られていた。最終的に、参加者全員がバルーンハウスに入り楽しむことができた。活動後には、大人と子どもが遊ぶ関係と、遊びから考える父親の子育てについてのミニ講義と父親同士の質問コーナーが設けられた。

(2) 検討すべき事項

〔父親同士の質問コーナーでのやり取り〕

○生活について

〔父親A：子どもが5か月で、初めての子育て〕

夜に寝るときに、子どもの寝返りが大きかったり、子どもが起きてしまうので、親の睡眠

時間が短くなる。ベッドなどを工夫したがよいでしょうか。

[父親B：3人の子どもの子育て経験]

子どもが寝返りをうったり、目を覚ますことは自然なことなので、それを制限するような方法は、私はとっていません。

○遊び場について

[父親C：2歳の子ども]

夜勤が多くて、子どもと日中に遊ぶ時間が体力的にとれないことがあるんです。

[父親B]

子どもが思いっきり遊べて、親はゆっくりと過ごせるような場所や施設が欲しいですね。

○子育て支援講座について

[父親C]

子どもと一緒に作って遊ぶことをもっとやってみたい。そういったことを経験していくと、普段の生活でも子どもと、ちょっとした遊びができてくるんじゃないかな。

○今後、参加してみたい子育て支援講座の内容（複数回答）

- ・絵や工作などの製作体験（4）
- ・運動遊びの体験（4）
- ・子どもの心理や発達に関して（3）
- ・子育ての方法について（1）
- ・絵本や紙芝居の体験（1）
- ・歌を楽しむ体験（1）

子どもの年齢の異なる親子や兄弟姉妹が一緒に参加していたため父親には年齢の低い子どもへの対応ができるように、活動的な子どもの対応をボランティアスタッフが行った。そのため学生ボランティアは、子どもとの関わりは個別にできていたが、当初想定していた父親と子どもの関わりをサポートするという役割とは異なった活動となった。余裕をもったボランティア人数の調整が、今後の課題である。また、製作体験や遊び体験の要望があることから、子どもと親と共に体験を行う立場、役割としての学生ボランティアの位置づけが重要な要素となるといえる。

(3) 展 望

本事業は、栄町子育て包括支援センターによる子育て支援事業であるため、年度のテーマにより講師依頼があり、それに伴いボランティア募集を行っていくことになる。また、連続した3回の講座であるため、その都度講師が異なることから学生のボランティアが途切れてしまっている。

継続的な実施や、学生ボランティアの連続した参加により、子どもの成長や親子関係の成長を感じることでできる活動となると考えられる。

イベント2

調査期間：2023年12月

対象者：千葉県内の子育て支援事業施設主催のイベントにボランティアとして参加した学生6名

調査方法：イベント後に調査項目を提示し、自由記述式の調査を行った。

調査項目：良かった点、改善すべき点、今後行いたい活動、感想

分析方法：自由記述で書かれた文章から萱間（2007）を参考にしてデータをコード化して同類項をまとめた。

倫理的配慮：調査実施にあたり、研究の目的と内容、個人情報の厳守について明記した文章を提示し、口頭でも説明をし、同意を得られた場合のみ研究対象とした。

イベント概要：「千葉市花見川区花見川団地フェスタ」

- ・開催日：2023年12月9日（土）
- ・共催団体：花見川子育てリラックス館
- ・ボランティア実施にいたる経緯：教員のつながりから当該イベントの紹介を受ける。
- ・詳細：千葉市の子育て支援事業施設（花見川リラックス館）との協働イベント。花見川団地フェスタにおいて、絵本の読み聞かせ、工作コーナー、ゲームコーナーなど地域の親子が楽しめる催しものを学生と共に企画し実施する。
- ・参加学生：1年生6名
- ・学生ボランティアの募集方法：全教員にゼミ単位でのボランティア参加を教授会とメールで呼びかける。参加表明がなかったことから、教員が担当する授業内や個人面談時にイベントの告知を行う。
- ・準備期間、内容、準備の様子等：準備期間は10日間。第1回目の打ち合わせではイベント概要を共有し、参加学生より、やってみたい活動案を集める。その結果、青空古本市での絵本の読み聞かせと共に、製作コーナーの企画が浮上する。クリスマスが近いこともあり、模造紙に描いたクリスマスツリーに、参加した親子が別紙に絵を描いて飾り付けをする製作活動を行う。学生は空きコマを利用し、当日までの準備を進めた。

結果と考察：

(1) 当日の様子

当日は晴天で暖かく絶好のイベント日和であった。花見川子育てリラックス館の職員の方々に温かく迎えられ準備を開始する。製作はリラックス館の前で、絵本の読み聞かせは広場で行われていた無印良品の中古絵本の販売の隣で行った。製作班の4名は、色を塗ったりシールを貼ったりして作るクリスマスツリーの飾り製作を0歳児から小学生までの子どもたち対象に丁寧に関わっていた。絵本の読み聞かせ班の2名は手遊びをしたり、学生たちが用意した絵本以外に、その場で子どもたちが持ってきた絵本を読む等臨機応変に対応していた。

(2) ボランティア参加学生の学びと気づき

良かった点、改善すべき点、今後行ってみたいことについて記述内容を表5に示した。

良かった点は、自分たちで立案して実践できたこと、当日子どもたちや保護者が楽しんだこと、イベントに参加したことにより何らかの利益（楽しみ等）を得たこと、に分けられた。改善すべき点は、行ってみて、持ち帰るものがあつたほうがよかったという気づきが多かった。また、現場で施設の職員から借りる物が多く準備の不足があつたという気づきがあつた。さらに、今後行ってみたいことについては、もう少し活動的な内容を取り入れたいという意見が多かった。

参加者は、1年生であること、短時間での準備期間、はじめての場所での取り組み、とい

う点から、今回の活動は高く評価できるものであると思える。しかし、行ってみてこれらの点に気づいたということが重要である。今後の取り組みに期待したい。

いずれにしても今回の取り組みでは、実際に地域に入って親子と関わり、子育てに伴う現状の理解、具体的な保育実践の手法を学生相互に学び合えることができたと考えられる。

表5 学生の学びと気づき

| 良かった点 | |
|-------------|--|
| カテゴリー | 記述内容 |
| 立案、実践できたこと | 自分たちで立案し子ども達を楽しませることができた 学校で準備していった製作物を子どもたちが簡単に理解して楽しんでいた 短い期間で準備したものを子供たちが夢中になって制作してくれた 計画的に皆で製作物を完成させることが出来た みんなで準備した製作物を、子どもたちが積極的に作りに来てくれた |
| 子どもが楽しんだこと | 想像以上に盛況で、子どもが途切れずイベントに参加してくれた 子どもならではのアイディアが発見出来た 何個も製作する程、子どもたちが楽しんでいた たくさんの興味を示して貰えた 子どもたちの方から興味を持ち参加してくれた どの年齢の子でも楽しめていた 集中して素敵な飾りを作ってくれた子がとても多かった 子どもたちが作ったものでひとつの作品が出来上がった |
| 保護者が楽しんだこと | 作品の前で写真を撮れた |
| 何らかの利益を得たこと | たくさんの子供たちやその家族とコミュニケーションが取れた 保護者の方とお話しすることができた イベントの楽しさを知ることが出来た 自分たちも楽しく参加出来た 準備しているものの他に子どものやりたいことを臨機応変に対応できた 地域の子どもたちと触れ合い、一緒にイベントを楽しめた 花見川団地の事について知ることができた |
| 改善点 | |
| カテゴリー | 記述内容 |
| 立案の甘さ | 持って帰れるものを用意すれば、家に帰っても楽しかった思い出として残る 思い出になるものがなかったので家に持って帰れるものがあるとよかった |
| 準備不足(製作) | 連携がうまくとれていなく、先方に借りる物が多かった 製作物を入れる箱など用意できていないものがあった 模造紙の裏に窓ガラスを貼ることを想定して準備できていなかった |
| 準備不足(読み聞かせ) | 絵本の読み聞かせをする時間と集客方法を考えていなかった 絵本の読む時間をしっかり決めて呼び込みなどをした方が良かった 活動についての看板のようなものを用意していなかった 読み聞かせに集中するための仕切りのようなものが準備できていなかった 興味の引くような看板を製作しておけばよかった 手遊びなどももっと入れればよかった |

| 今後行いたいこと | |
|------------|--|
| カテゴリー | 記述内容 |
| 作る・遊ぶ・持ち帰る | コマづくりなど自分で作って持ち帰れる製作企画 思い出として記念に持ち帰ることができる製作物を作る |
| 作る・遊ぶ | ゲームを作ったり、自分たちが考えて作ったおもちゃなどを使って遊ぶ 製作、絵本の読み聞かせ、ゲームコーナー(昔遊び) 作ったらそのまま遊べるような制作物を作る |
| イベント | 短大生が企画するお楽しみ会 団地を利用したスタンプラリーや宝探しなど |

(3) ボランティア参加学生の感想

参加した学生の感想を原文の意味を損なわない程度に修正して下記に示す。

〈感想〉

- ・短い準備期間であったが、私自身も楽しかったし、子どもたち側から絵を描いてみたいと言って参加してくれことがとても嬉しかった。
- ・乳児から大人まで幅広い年齢層と接することが出来て、とても楽しい時間だった。
- ・自分たちで製作したものを子どもたちにやってもらうボランティアが初めてだったので、上手くできるか心配だったが、子どもたちが笑顔で楽しく参加してくれて、教えていた私自信も楽しかった。
- ・製作している時に子どもたちと特技や好きなことなど色々な話ができてとても楽しかった。個性溢れる作品がたくさんあって子どもの発想力はすごいなと改めて感じた。
- ・自分たちで製作したものを夢中になって製作している子どもたちの姿を見てボランティアに参加して良かった、準備して良かったと思った。
- ・一日の短い時間ではあったが、学校ではなかなか体験できないことや自分の知らない違った環境について学ぶことが出来たことがとても嬉しかった。
- ・思っていた以上に子どもも多く絵本にも興味を持ってくれていたのが嬉しかった。
- ・短い期間だったのですが、ボランティアに参加した友達と楽しく終えたこともとても嬉しかった。
- ・初めてのボランティアだったのですがとてもいい思い出になり、またボランティアがあれば参加したいと思った。
- ・一人一人の子どもたちとの関わりはとても短い時間ではあった異年齢の子どもたちとコミュニケーションをとることができとても楽しかった。
- ・自分たちが計画したものをたくさんの人に楽しんでもらう私たちにとっても子どもたちにとっても素敵な思い出になった。
- ・先生方、私たちがやってみたいことを形になるようサポートやアドバイスをしていただき感謝。
- ・短期間での準備と短時間でのボランティア活動だった、何もかも初めてのことで、自分自身の成長にも繋がるとてもいい機会だった。今回は偶然にもメンバーが同じクラスで、

全員の時間が確保しやすかったので、円滑に事が進められた。

- ・普段実習以外で子どもたちと触れ合う機会は中々無いので、ボランティアとして子どもたちと触れ合い、読み聞かせや企画を立てる事ができて良かった。
- ・なにより子どもたちと一緒に遊ぶ事ができて幸せだった。
- ・絵本の読み聞かせでは、私の知らない絵本を沢山リクエストされ読んだが、初見ですごく下手な読み聞かせだった。しかし子どもたちはきちんと聞いてくれた。子どもたちにとっても私にとっても、とても素敵な時間にする事ができた。

実習以外で子どもと関わる機会のない中で子どもたちと接することができ、楽しかった、そこからの学びがあった、自分たちで計画したことが喜ばれた、と肯定的な感想であった。ボランティアを募る時には、なかなか集まらなかったが“行ってみて楽しい”、ということを経験した参加者を中心に広めていけるとよいと考えられる。

また、“私たちがやってみたいことを形になるようサポートやアドバイスをしていただき”とあるように、学生が考えたことについて、学生に任せっぱなしではなく、教員が少し指導を加えるとよりよい活動になることもわかった。

今回の参加者は同じクラスからの参加であり、空き時間が同じで準備がしやすかったと感想に書かれている。準備のためには同じクラスの学生で参加するとよいが、重要な体験学習の場であるため、クラスを越えた活動も必要であり、今後の学生のボランティア要員については課題が残った。

まとめ

本研究は、現状や課題、子育て支援のニーズを実際に子育て支援に関わっている事業者や参加者からの調査、外部団体の子育て支援への参加により、具体的内容を含めた大学における「子育て支援」のあり方を検討することを目的とした。

まず、調査とイベント参加からわかった子育て支援の内容については、話しを聞くだけの講座、遊ぶ場の提供だけではなく、保護者同士のつながりが生まれるきっかけとなる何らかの体験を伴う講座を希望していることが示唆された。希望する講座の内容には父親、母親の希望することに差異があり、父親は運動あそびを希望し、母親は製作や歌などを希望する傾向が見られた。絵本や紙芝居については父親、母親に差異はなかった。講座を受ける対象者により内容を検討することを考えたほうがよいことが示唆された。また、製作などの活動は、難しいものではなく、簡単に色を塗ったり絵を描いたりすることでも充分楽しめるということもわかった。

研究1の子育て支援事業従事者から、母親が元気になると子どもが元気になるという実態を示唆されたが、井上ら、番匠ら（2010、2011）の、母親を元気にすることが子どもを健やかに育んでいくことに繋がるという考え方と一致している。母親が元気になる講座内容を考えることは必須である。

富田ら（2023）は、大学における子育て支援センターにおいて、コロナ禍前の2019年度の調査結果と照らし合わせると、保護者自身のために利用される傾向が高まったことを示唆している。子育て支援事業の内容は子どものための事業であると同時に保護者のための事業であることを考慮する必要がある。講座は子どもだけでなく、親子で楽しめるものであることが必須である。

課題と展望

今後、千葉敬愛短期大学において、外部イベントへの参加のみならず、メディアセンター内の“えほんのもり”を活用した大学開催の子育てイベントの本格的な始動が望まれる。

齋藤（2023）は、大学で行う子育て支援は利用者だけのものではなく、保育者養成校としては、学生の学習の場となるべきである、と示唆している。すなわち、学生の参加のない支援事業はない。

しかし、学生の参加をボランティアで行うとなるとその募集方法には課題がある。イベント1においてもイベント2においてもなかなか学生ボランティアが集まらずにいた。奥村ら（2023）も地域との連携での子育て支援事業の学生参加について、実習とは異なる学びを得る貴重な体験であることを示唆した上で、実施スタッフとなる学生の確保を課題としてあげている。今回、最終的には6名集まったが、授業や面談での呼びかけにも最初は全く応募者がなく、ボランティア募集には困難を抱えた。

今回の参加者は、参加したことを前向きに捉え、続けて参加したいという意向もある。今回の参加者がリーダーになり、子育て支援隊のようなグループを結成し、学校内外で子育て支援の協力を行っていくことはその一助になると考えられる。

また、ボランティアというだけではなく、授業の一環として子育て支援事業を利用するという方法も考えられる。新山ら（2023）は、学内に地域子育て支援拠点を開設したことから、子育て支援についてより深く実践的に学ぶために子育て支援についての科目を新設したことを紹介している。授業と子育て支援を関連付けることにより、子育て支援自体にも学生にも大きな影響を与えることが考えられ、今後授業と関連付けることを検討されることが望まれる。

難波ら（2022）は、就学前児をもつ全戸の子育て中の男女2,113名を対象にWeb調査を行ったが、対象者の52.7%が地域子育て支援拠点の利用経験があったと述べている。地域子育て支援事業の利用を希望する人たちは「子どもを遊ばせる場や機会」を強く求めていることが示された。しかし、その中で大学の地域子育て支援拠点の利用者は15.7%であり、かなり低い割合であった。大学での子育て支援拠点の役割として、大学生と地域住民との関わりを促進するプログラムを提供する必要がある。その一例として林（2023）が紹介しているオンラインで行う卒乳教室は、まさに地域住民のニーズと看護大学ならではの専門性を生かした内容である。実際に子育て支援事業を行わなくても、楨尾ら（2014）が述べているように、保護者と専門機関との橋渡しになる、住民に理解を求める働きをするなども必要であろう。

大学の専門性を生かして地域住民に貢献できる支援を今後は実践しながら検討していくことが望まれる。

最後に、「子育て支援」は、親と支援者との間に大人同士の関係を築くことで、孤立を予防し、「子育て」（親の養育）と「子育て」（子どもの発達）を支援することによって、家族の結びつきを支えることにもなる（加藤、2015）ことを再度確認したい。母親だけに任せない、母親に加重がかからない子育ての実現に向けて、保育者養成校としての独自の子育て支援事業を始動し、今後はその実践からの考察が望まれる。

[謝辞] 本研究の調査に協力してくださいました子育て支援事業従事者の皆様、子育て支援イベントに参加してくださいました皆様、ボランティアスタッフとして協力した千葉敬愛短期大学の学生の方、イベントの参加を招聘してくださいました花見川子育てリラックス館の皆様に記して感謝申し上げます。

■引用文献

- ・新山順子、京林由希子（2023）保育者養成における子育て支援を実践的に学ぶ授業モデルの試行 岡山県立大学教育研究紀要 7（1）、50-56.
- ・伊藤孝子（2019）保育士養成課程を有する大学における子育て支援活動～「ぶんぶんひろば」の教育的意義について～ 滋賀文教短期大学紀要 210.
- ・井上千晶、番匠明美、三木麻子（2011）大学における地域子育て支援—しゅくたん広場での実践—夙川学院短期大学教育実践研究紀要（3）、17-24.
- ・奥村香澄、傳馬淳一郎、瀬野友寛（2023）名寄市と連携した保育・子育て支援事業 ～2022年度 子育て支援実践報告と学生スタッフへのインタビュー～ コミュニティケア教育研究センター年報（7）、67-70.
- ・加藤邦子（2015）子育て支援に関する政策動向 家族関係学 34（0）、37-45.
- ・木脇奈智子（2012）多様化する「子育て支援」の現状と課題：新たなニーズとそれに対応する事例から 藤女子大学QOL研究所紀要／藤女子大学QOL研究所編 7（1）、37-43.
- ・久保田健一郎、玉井久実代、野口知英代（2021）保育者の専門性としての子育て支援に関する研究—大学における子育て支援活動「わくわくランド」に関連して— 国際研究論叢：大阪国際大学紀要 34（3）、69-87.
- ・齋藤めぐみ（2023）大学における子育て支援のあり方についての一考察 千葉敬愛短期大学総合子ども学研究所 年報 39-48.
- ・富田道子、加藤弘美、國清あやか、須崎朝子、瀧口美絵、田丸尚美、深澤悦子、本岡美保子（2023）コロナ禍における広島都市学園大学地域子育て支援拠点事業の役割：利用保護者へのWeb調査から（第8回調査）広島都市学園大学子ども教育学部紀要 9（2）、43-52.
- ・難波愛、道城裕貴、清水寛之、村井佳比子、岡野太郎、中村敏（2022）地域子育て支援拠点事業の利用状況に関する全国Web調査報告—大学施設利用を中心に— 神戸学院大学心理学研究 5（1）、53-61.
- ・林里沙子（2023）地域におけるオンライン卒乳教室の取り組み—行政と大学との連携事業による子育て支援の実践報告—（実践報告）京都看護（7）、47-53.